壁小

始

特110
590

小説

阿部蕙月

大正
5 3.28
内交

大正
5 3.28
内交

位置はあるが形のない、半透明な小宮の
なかに、かさ〳〵、かさ〳〵と、壊れた
ものが摺れ合ふやうな、粗雑な音がする、
底淋しいそして微弱な刺戟！春晝寂とし
て、何の音だかはつきりしない。

大正五年二月十四日　　霧　月

△洪水の前
△青き病室
△心の隙間
△べに椿
△洪水の後
△春星
△追憶より

1
洪水の前

□洪水の前

山茶花に午後の日が照りわが頭
少し變なと則を出づる

2

小筥

我といふ大方のものを失ひて
生命(いの)ばかりが殘りける哉

云ふ事が對(あひ)手の胸にはまらぬを
もどかしがりて秋の野かへる

3

洪水の前

念珠繫ぎに繫がるやうで解き難きは
人の心かと思ふ春の夜

雨垂(あま だ)れのそのひと雫(しづく)地のそこの
底まで深く泌み込むこゝろ

人ごみに誰ぞやわが背を突いて逃げし
夜店の方へにごる春の夜

山の湯の湯氣がつゝみしはだか女や
月の光りの一とこ青き

何でもなきあの一言がおもしろく
胸にのこるとまだ云はざりし

しよんぼりと障子の際にゐずくまりて
椿落つるを恐しがりぬ

白々しく自劣して秋をくらすより
可いからいつそ死ねと云へかし

すさまじき罪の敗者はやなぎ散る
夕明るみにはつきり立ちぬ

おそき日や取り留めもなき手紙書けば
君の返事も取りとめの無き

簪で乳房のあはひをそと突いて
かろく否みぬ最後の言葉

一人の子は大甕にかくれ一人の子は
木に攀じ登る秋の夜の月

ずり出でゝ疊に頰を着けて寢ぬ
春の明けがた溺れ女の樣に

洗濯のたらひの水に日がすべり
春のゆめ象天井に搖る

人の世を厭といひて云ひたらぬ
心おのづと海の方に向く

探すものゝ見當らぬ氣のいらだちを
人が訪ひ來て端正に居る
どこやらの街夢と浮き寢不足の
眼が窓に倚る海棠の雨

本箱をひつくりかへして驅け來しが
たゝずみて居ぬ木蓮の下
泣けと云ひ死ねかしと云ひ涙ぐみて
自劣つたがるを微笑みてゐし

もう何も云はぬと荒く出でゆきし
男の眼など思ふ春の夜

執拗くも昔のことを繰りかへすに
かゝはらぬ心野菊摘み摘み

わからない心と心世にふたつ
結んで見れど離して見れど

少女ふたり枕に侍るこゝちにて
寢ねてあらばや春の日闌けし

ばつたりと行き着いたやうな心もち
女は醒めし瞳を向けぬ
ぢやぶ〳〵とぬかるみ道を走り來ぬ
君泣き伏して桃散る家へ

その女われと見るごと塞ぎゐる
塞いでばかり泣かぬが淋し
死ぬるとは消えて無くなる事か知らと
それぱつかりを一日考ふ

この國は老いし人のみ多ければ
住みにくしなど語り合ひける

春の星柳にくもる橋たもと
黒き眸のうごかぬを見し

魂(たましひ)をさゝらで洗ふやうな氣もち
後(こ)はしみ〴〵君を思ひぬ

つゝましう髪など結ふて訪(たづ)ね來ぬ
春の暮れがた他人のやうに

花の雨やゝ傷ましくこはれたる
玩具のやうに我れを見る日や

原稿紙臂におさへて狂暴の
こゝろ放ちぬ冬の海原

戀はるゝと知りそめし日や仲の善き
友の群れともはなれて一人

毒を呑みし女と會はずなりぬれば
我もいつしか世の並の人

水仙に夢を吸はれて戀覺めし
その刹那より泣くを忘れぬ
青空より血汐ぽたぽたと滴るやうに
椿落ちこむ朝の古沼

□青き病室

脉搏をかぞへて居れば雨しぶく
硝子障子を鳥摺れ飛びぬ

口漱ぎ病床にかろく腕拱みて
端坐してある朝のほどかな
星沈むほうへ人の世遠う退いて
一時が鳴りぬなほ眠られぬ

生溫るき風ふと撫でぬ頸すぢを
死が惡戯をして行くやうに
何と云ふ心もなうて荒れ狂ふ
冬の海原見れど見飽かぬ

秋晴れのがらす障子に机寄せ
醒めし女の睫毛を描く

廻診の醫者がどやどやと入り來れば
おどおどしけれ病ひの擒子

眼閉づれば暗き洞ろにまた暗き
斑點がわいて冥府に繋がる

硝子窓に虫の羽一つ粘り着いて
我と空とを近づけぬかな

病院の冬の眞夜中きちがひが
うた唄ふほど凄じきはなし

わけもなく藥飲まぬと言ひ張りし
後の寂しさ水仙に悔ゆ

桃色の封筒捨てぬ何うしても
死んぢや厭よと云ふ句がのこる

苦しさが去れば氣だるう疲れてゐ
生命も我も知らずに眠る

看護婦を叱れば直ぐに出てゆきぬ
誰も來ぬまの夕暮れ時よ
根むほどの強きこゝろは衰へぬ
病みて久しく身も衰へぬ

左程氣にならぬ日もあり厭で〳〵
たまらぬ日あり青き病室
撿溫器汗ばむ肌をすべり落ち
鈍色雲が窓を蓋する

夜明けぬれば青空窓を遠うばなれ
から風が鳴る冬となり居り
慰安(なぐさめ)の語(ことば)をさがし得ぬさまが
痢みながら且つおもしろかりき

乳のやうな柔(やは)ら言葉を聞くに堪へず
動悸おさへて無理に眼を閉づ
夢のなかに紅い菩薩が居ならびぬ
そのまゝ明けぬ熱の褪めぎは

附添人に泊つてゆくと話しゐる
女の言葉耳に聞きつゝ
胸の痛み水仙に移しあかつきの
濕り地黑き土踏んでみる

臥して見る庭にちよい〳〵人が來て
苺を植ゑぬ撫子を植ゑぬ
癇高く人のゝしれど衰へし
身は細りゆく月の影かな

紅き陽がたゆたひ沈む砂丘ほとり
疲れごゝろの引き摺られゆく

人來ればたゞ可懷しき人去ねば
しばらく悲し果敢なきいのち

誰も來ぬまゝに日暮れておちつかぬ
額のうへに灯りしかな

狂患者が街へ逃げたといふ噺し
その後を知らず熱に寢て居る

白き紙に小さく包みて戸の外の
雨ふる闇に捨てたきいちの

□心の隙間

洪水にたゞよひ着きし名無し村
こゝに君得て世を終るかな

驚きのやがて淋しさ來るあひを
椿が落ちて水輪ひろがる

空長屋の前にまた立つわれを見ぬ
君旅立ちし後の二三日

一歩去ればひと歩暗く詩の戀の
繪の卷くづす岐れ路かな

淋しいと小さくなつて居るよりも
少しは人を罵り給へ

共にあればひたと心が結び着く
別るればすぐばら〳〵になる
或時は彼の女の事が氣になりぬ
足袋に下駄の緒染みてありしなど

歩きながらおどけ噺もしてけれど
別るとすれば尙悲しかり
憎らしく野卑な惡口云ひし人等
かげ口も云はずなりし淋しさ

ぱつちりと涼しき瞳持つ君が
なぜに偽りばかりを云ふや

こんな世に生きて居なけりやならないかと
考へて見るさびしき男

その人は離縁になりぬ意地わるく
それで死ねぬと笑ひし人は

夕雲の日々に異りどうしても
解し兼ねける心のなぞよ

堪らない程戀しと日ごと逢ひたりし
何時頃よりか音づれもせぬ

この日より人の心をことごとく
つよく惡むと書き送る哉

友が來てしくぢり嘶などするに
笑ひ過ぎたる後の寂しさ

死ねと云ひて捨つるが如く別れ來て
木の實をこぼす鳥におどろく

氣兼ねして手紙書きにぶる灯のほとり
山の蛾が出て這ひまはる哉
何事かこゝろの隅に喰ひこみて
離れざりけり春雨ひと日

腐り水落ち葉沈めてこほりしが
夕陽(ゆふひ)映ればやゝ艶(なま)めきぬ
山茶花に日は夕かげりふと思ふ
ぼんやり生きて居るといふ事

眞直ぐに堅く伸びたる戀なれば
枯木のごとくぽつきり折れぬ

憎めども今日もがや〳〵饒舌りゐる
金切り聲の男死ねかし

二三行書けばまた字が歪むなり
手紙をやめて蝶追ひまはす

こんな時人とし知覺失ふのぢや
ないかと君を待ち待つあひだ

君がさす傘に雨降るこゝちして
二階から見る小芝居の木戸

川の面に相合日傘かげ伸びて
橋板きしるおかしき別れ

髪の毛は膝にふるひぬ潮じめる
障子に烏の影さと落ちて

徂く春を風船玉のやうなこゝろ
折り〳〵膨れ折り〳〵萎む

もゝちとせ別れの日より死の日まで
我れかたくなの默しも淋し

きみが影わが影の上にかさなりて
水面に消ねぬ花散る心地

半襟の留針が落ちたるしら菊の
鉢の眞上に小さき日がある

人あまた竹槍さげて我れを追ふ
夢におびゑて朝寢してけり

星月夜くつきりと白い輪廓の
女とおなじ間隔にゆく
遅き日や眞紅(まつか)な帶を脊負ひし子が
寺の土塀に添ふて曲りぬ

春雨の柳に古き家なりき
媼かまどに鐵漿つけて居り
思はざる田舍の驛にふと會へば
素知らぬ顏に柿さげて君

涙ふと美しきものと知りしより
君のこゝろを注意して見る

甲板に浪消わぬれば黑ンぼの
ひとりが躍る夏の夜の月

□べに椿

輕業師番傘まはす傘のうへに
皿が躍るよゆく春の路次

百姓に煙草の火借りこゝろ足る
君は蟲を追ふてなまめく
むかし〳〵最初の人が湧いた世の
霧ふくらみぬ故郷罩めて

何ごとも忘れてある日花散る日
柱時計のしづかに鳴る日
海に向いて立てる女の全身が
青葉の影に青く染まれる

渡り鳥に見かへれば暮るゝ靄の中
顔をにごして君なほ立てり

大いなる蜘蛛壁を這ふ夕暮れに
咒咀と書いて手筥に秘めぬ

紺蛇の目すぼめばちらと白い顔
筆持ちしまゝ二階から見る

漢文の教師が靴をみがき居る
軒につばくら子を六つ産みぬ

恨みごとかぞへて待つ夜の
鬢のほつれに星の坐ゆがむ

霙るゝや山の溫泉宿にたゞ一人
鏡花讀む夜のたましひ白き

圓い目の小さい湯女が幽靈を
見に行かうかと灯を細うしぬ

土橋まで默つて歩き立ち止まり
默つて別れそのまゝかへる

寢ぬくもりし蒲團から出てまばら灯が
殘る塲末を時雨れゆくかな

春の湖さゝ波寄する方に立てば
心に小さい皺をもてくる

いさかひの後にやさしく氣を引けば
澄ました顏を少し横向く

感じのみに筆さき覺めしがらす窓
川尻涸れ洲沈む星かな

戀つめたく執念く燃ねぬ暴風雨の
海に流るゝ燐火のやうに
一人の子が泣けば他の子等逃げかへり
長家の辻ににごる月かな

水錆沼の隅がぶく〳〵ふくらみて
銅のやうな月を産みける

小さい雲が一つちぎれて風にとぶよ
秋をさまよふ繼兒の如く

小宮

赤錆びの鈍刀で骨を磨るやうに
筆はうごきぬ涙含まれぬ

女の神と男の神とひと日たわむれし
春の小島のおぼろに白き

べに椿

怒る時はおそろしけれど癇癪の
癖が無ければあの人好かぬ

叱られてよろこぶ程にわがこゝろ
卑しくなりぬ男の前に

泣きたい程わが儘ばかり云ふ人の
味方となりて母といさかふ

ふと見れば君の顔たゝほの白う
森をはなれし春の星かな

叱られてたゝはら〳〵と涙ぐめど
やさしき後は尙泣かれける

我こそは泣けぬ男と生れけれ
尻冷ゆるまで若草に坐る

紫の袱紗につゝみ春の日を
君に投げ込む小さな秘密

毛蟲をば雪駄の金で踏みにじる
むごき女を愛でそめしかな

塀のかど曲れば影が先きになり
前と後ろに蟬が鳴きだす

すぐ怒りすぐ笑ふ人のかはゆくて
光る白雨に傘さしかけぬ

蝶々がもつるゝやうに縺れあひて
野を流れゆく魂二つ

石くれと活きたるわれと野に二個(ふた つ)
あゝ春晝の陽は酣に

われ君にやさしうすれば君われに
泣くやうになり初夏となりぬる

折にふれてもの怖ぢの目に人の世を
戀する如くのぞく事あり

さゝいなる事に腹立つさびしみを
べに椿咲く垣に添ひ行く

若草や石ころやそこにわが頭脳
壊れずにあり春の陽けぶる

□洪水の後

仙人掌を二階の椽に置きしより
午後としなれば雷が鳴る

冬の雨あかるき傘の裏うつる
綿帶の手をさびしみて行く

咲きのこる草花一つ摘み採りて
考へてみる安價な生命(いのち)

疑へばわけのわからぬ事ばかり
わからぬあひだ沈默にゐる

銀の雨芍藥の紅き芽に降る日
こゝろに溶けぬ塊(かたまり)がある

いぶり炭庭に捨つれば眞白(しろ)い
煙かたまる氷雨の日かな

いつはりの女の言葉やゝかなし
乳色薔薇の造花のやうに

春の宵鶯(ね)鶯(し)の目剝げしおもちや筥に
姉が秘めけん水晶の念珠

戸の外に羽根つく音と枕べに
恨みごと云ふ女の聲と

悲しさはやさしき妻が炬燵から
肩に着せたる春着のおもき

生れたての清き世界がわが前に
降つて來るかと初空を見て

笑ふ時の目尻の皺が何處やらの
年やゝふけし人形に似ぬ

春宵や水面を伸びて相慕ふ
流れへだつる川岸の灯二つ

繼母は嫁くか否かと口やさし
泣き伏せばまた淡雪の散る

歪みたる鏡のやうに君がくる
こゝろ映すも取りとめのなき

ひさ〳〵に八十の母の家にかへり
安き思ひに釣瓶繰りつゝ

ふるさとや大海原に似る靄の
曉のなかより人湧き出づる

寢不足のけだるき頭(あたま)ぞ板に
蜻蛉(とんぼ)が孵(か)へる朝月夜かな

ぼんやりと戀を忘れてなほ生くる
悲しみに見る連翹の雨

山吹に泥はねかけて逃げ行きし
女たづぬるきよとゝ男

朝がすみ京とつゝきぬ黄鳥と
花賣りと住む大原の里

事ごとに人を恨らめば人は皆
我をはなれて春は行く哉

筆とれば吃驚したといふやうな
まんまるい眼がそこに浮く哉

考へて見れば何でも無いことが
頻りに淋し五月雨ふる日

久しぶりに街に出て見て仰山に
人生きて居るを不思議と見る日

哲學は酒に溶けたりあけぼのゝ
春はむらさき夢見る景色

じやうだんに君の背になど倚りし事を
おぼゐて居るといふが嬉しき

我れひとり草に寢てをれば何時しかに
眠くなりゆく目に蝶々哉

囀りの林へそつとしのび入りて
袂の寫眞出して見るかな

梨の花そこに消えたる君の影
見て居れば眩暈しさうになりぬ

ゆく春を幾日幾夜寢つゞけたら
記憶の皆が忘られやうか

人と見て笑つてばかり居るけれど
獨りになれば泣く女かな

死にませう死にませうよと云はずなりし
その人に籠の小鳥がなく日

紅燈にきみ怨ずればこゝろなく
われ笑みしと云ふが別れとなりぬ

朝な夕なうまるゝ謎の一つ〳〵
解く〳〵に糾るゝわが心かな

春の宵こよひ恨みのかず〳〵を
述べて泣かんと花活けながら

その言葉あまり美し清し強し
別るればすぐ疑はるほど

悦んでげんげ摘み居しが泣き出しぬ
何故に泣くのか私は知らぬ

寝並べる蕃地の土人みなの目が
とろりと空に蝶々もつるゝ

燃ねさかる焔のなかをゆくこゝろ
氷のそこに眠れるこゝろ

朝まだきより酒の飲みたき心地すれ
ペン〳草に實がのる頃は

果實(くだもの)の汁に染まりしくち黑き
しろき少女をわが子かと見る

□春星

彼の女(じょ)云ひぬ厭なゝ世に今しばらく
わたし死にたいと思はないこと

梨の花にわざと素氣なう別れたる
すぐに會ひたくなつてくる哉

不意に訪へば桃咲く白なた髪垂れて
髪洗ひ居るこよなう嬉し

春雨やゆうべ生れしなぞ一つ
籠の小鳥のふところに住む

ひとゝころぢつと見詰むる人の目が
雨の野をゆく身にまつはりぬ

麥隴のなかに菜の花少し淋し
馬の背で行くふるさと道は
行く秋をまよひかへりて慄へゐる
わが魂を身に抱き寄する

人間と名の附く者のうはさなど
心にとむる君ならなくに
初夏の着物も肌もみな青く
若葉かぶさる木蔭道かな

何でもなき事にふと氣の沈むとき
窓に五月の入日するとき

なぜ死ぬと巡査の樣に云ふけれど
生きて居たつて詰らない哉

門口でわが名を呼んで逃げ行きし
春の夜の人今は亡き人

よく饒舌る君はめでたし譯もなく
たゞ饒舌るのが淺しけれど

金火箸で灰をみだして斷れ〴〵に
話す時雨の夜頃も戀し

削りさしの小さき鉛筆捨てがてに
掌に玩ぶ半端ないのち

五六人講者に似たる身を山に
入ればせみ鳴く郭公鳴く

何ものも見るにわが眼は疲れたり
電車の窓に五月雨るゝ頃

皺のない手が淋し身につまさるゝ
話などして客酔はぬ日は

羽織のまゝ一寝入りせし春雨の
柳のつゆに覺めきらぬ宵

戀し得ざる胸の悲しみ白萩の
露に散らして日を眩しがる

常磐木の杜とはなれて夕ぐれの
空ぎは立てる黄なる洞ろ木

沼の宮や古沼の水は音もなく
椿落つるを魔のやう吸ひぬ

悲しさを膝に落して友禪の
前掛なぶりやがて出て行く

いさかひをほかの言葉にまぎらして
女默りぬ春の雪見る

人あまり落着いて居るが憎らしく
歸ると起ちし我を卑すむ

こゝろみに男なれども拗ねて見る
文字のいちけに蟲の音寒き

宿を出て急いで街をはなれしが
何處へ行く氣かわからなくなる

雜音と煙草ににごる事務室の
午後のにぶ日が歌を奪ひぬ

ざし〳〵と機械のきしる音をきく
氷雨のそらに心のそこに

無造作に冷き死をば抱き寄せて
見ばや花散る美しき日に

土の底の暗い世界へひそみ入る
水の雫に眼は止めてあり

青ぞらや眉間の上に劔組みて
やと叫ぶ時悲しこの身は

春の雨われにかまはず人々ら
思ひ〳〵に仕事して居り

□追憶より

（一）

生れたる小猫と我に大勢が
つどひ興せし日は遠き哉

まゝごとの洗濯ごつこ石鹸の
泡がかゝりし山吹の花

雪の日を人に背負はれて學校へ
通ひし道のうねくゝ戀し

緒の赤き草履うつくし土筆摘み
陽炎ふなかに何を語りし

針箱や母の居ぬ日は縫ひさしの
紅絹裏淋し門の戸に倚る

鐵漿つけし母が唇すこし歪め
糸切る歯をば注意して見し
友だちはみな蟬取りに群れゆきぬ
一人はなれて寺から歸る

父はいま終の眼向けぬ枕もとに
ぢつと坐つて泣き得ぬ我に
死ぬといふ出來事おこり家の隅に
われを見出して人々の泣く

女郎花苅萱なんど裾を摺る
墓道登る母うつくしき

先生と巡査と寺の坊さんが
嫌ひと云ひて叱られし哉

泥棒が藏のかべに大き穴あけし
そこが明るく落葉する哉

（三）

六月のわが家を掩ひ水のやうに
ひらめく森に樫鳥さわぐ

村びとが女と戯れて夜をふかす
麥搗き唄を聞いて寢るかな

學校の古びし垣に身をかくし
伏し目して見し初戀のころ

水涸れし川底渡りおとなひし
戀としもなく繪など見て居る

言ふことがはつきりし過ぎ逡巡ふ間
をんなは深く考へ込みぬ

藏の扉にいぢけ萎みし蔦の葉に
紅い夕日がからみて去らぬ

ありのまゝ物語りする不用意の
われに泣きだせし女をまへに

槲濶葉こんもりとせし裏かげに
小鳥の樣にふたりが並ぶ

潦(かまだり)に青空晴れぬうつくしき
鳥一つ來て羽を濡らす哉

（三）

黄鳥や朝寢の蒲團拔け出して
雜誌搔きのけ賽布を探す
貨本を積みくづしたる片わきに
からだを圓く寢て居し男

汁粉屋を顔のつめたい街へ出て
劇場の屋根を振り返るかな

下宿屋や朝寢してゐる夜着の袖に
手紙來てをり旭は射してをり

懷ろ手して塲末の寄席へふらと入れば
前座が一人何か云つてる

信仰を心のうちにあなどりて
歸る霜夜の星の遠さよ

歸省する前夜はうれし友つどひ
荷物片寄せて皆雜魚寢する・
頭ひかる夜學の講師どことなく
落語家めくとスケッチにする

喧嘩してあらく歸れば下宿屋の
わが室ばかり灯(ひとも)さである
春の日は袴の裾にたゞよひぬ
泥まみれ行く雪解けの道

熟睡して頭痛去りたる一朝や
人の顔ごとしげ〳〵と見る

友一人と晝のみぞれに灯して
小説讀めば小説家めく

俳句會かるた會など名を附けて
先生の宅へ押寄せし頃

（四）

小母さんの嫁入りばなし離縁ばなし
冷わ茶捨つ庭梅に日闌けぬ

秋の夜の灯かげに小さい髷淋し
樂しみもなく生きてる女

青空にゴム風船がひとつ浮く
十日ゑびすの人波のうへ

頸すぢに白粉を塗る女教師の
横顔を見て風邪に寢てをり

清水のほうへ寂れ日逃げゆきて
東寺の塔が繪やうに錆びぬ

友仙に灯火映る冬の夜の
晴れ着女が襖を開けし

大勢のこゑ靜まればバオリンが
鳴る隣室に冬の夜ひとり

深草の小母さんに錢借りに來て
酒飲まされぬ鶯が鳴く

讃美歌をうたふ男女の聲のなかに
神にさからふ心が一つ

（五）

新しく家造りなりぬ黒がみに
春陽たゝゐて君が來る日や

寒き野を風に押されて歸り來ぬ
針に寢のこる女の家へ

若き妻は水仕のすがた釣瓶繰る
屋根に雪解の雫する哉

恨みごと呟いてゐしほつれ髪
小さき火見出し火鉢を吹くよ

あはたゞしう家に歸りて幼兒の
寢顏をぢつと見詰むるあひだ

泣き泣いて膝に眠りし小さき兒の
安き寢息や俄かにさびし

大きな眼とお凸額と結び考へて
この子詩の子に育てんと思ふ
世界一の小さき詩人の放埒に
泣かされるのを喜ぶ親よ

わかき母が洗濯すれば兒も眞似るを
戸に倚りて見ぬ旅人の樣に
汁粉めす孃さん呼べば黄鳥が
吃驚(びっくり)すると圓い眼をする

永き日や一人の子供椽先きに
おもちや毀して半日遊ぶ
鍬形のかぶと拐ぎ拔き宿月毛の
馬踏み潰し小さき暴君

五月雨のなかにわが家なつかしき
竈あふるゝ焰の色よ

（六）

病ひその後たゝて音信なかりしは
死んだのでなく嫁ぎけるらし

川のもや橋のうら這ふ夕ぐれの
なかに素足の眞白き別れ

傘に人目すぼめて街のかどに
君消ゆるまで跡退りゆく

彼の街に住めるをんなにこの冬は
私が病むと云ひ傳へたき

身のそこら冷たかりけり五月雨の

電車のなかに君見し夕べ

笑ふたり泣いたりするに適はざる

素直な顔をあちら向くなり

折り〳〵は思ひ出せども一たびも

夢なんど見ず月日はたちぬ

洗ひ髪の伊達巻きすがた初夏の

島の娘を思ひけるかな

おとなしく病みて寢て居る君訪ふに
小雨にけぶる町長かりき

（七）

野も君も小鳥も水も夕映えの
黄なる線もて描けるが如し

春風に袂ふくらむ渡し場や
女逃げ來て息はづませる

草臥れし君と別れて歸りしが
寢ねてまた聞く祭りの太鼓

若草に蛇のうろこの青く光り
胸にひらめく一人の女

柳わけて紺地浴衣の君消ゆし
そこらの闇の美しき哉

隅ッこに默りし一人だしぬけに
笑ふ女に盞(さかづき)向けぬ

人のかほ見れば腹立つ放埒の
我を囚へぬ小さきわが家

干乾びし胸の罅隙に毒甘く
にじむに似たる初春の雨

狂人のごとくはきく振舞ふを
嬉しと愛でし短日のころ

煤烟の底に機械きしれる暮の街
わが愛人もこの街に住む

158

小筥

二三反暖き日向に土地買ひて
百姓共と老いたき願ひ

國のはて遠き思ひにくよ〳〵と
飽き足らずふたりなほ語らひぬ

159

追憶より

折ふしの小さき事件が片づきし
あとに淋しき我を見る哉

五月の陽庭に青めば新築に
移り住む日の數へられける

大正五年三月十日印刷
大正五年三月十五日發行

小笘

定價金五拾五錢

著作者　阿部鷗月
著作權所有
發行者　京都市三條通寺町西入十八番戸　山中勘次郎
印刷者　京都市北小路通新町西入　須磨勘兵衛

發賣所

東京市淺草區御藏通り　岡村書店
京都市三條通寺町西入　振替東京一九〇六五番　山中嵩松堂
振替大阪五八三〇番

弘文社印刷所印行

詩集と歌集

▼尾山篤二郎歌集 さすらひ 定價金七拾五錢 郵税金八錢

▼富田碎花詩集 末日頌 定價金壹圓廿錢 郵税金拾貳錢

▼前田夕暮歌集 陰影 定價金七拾錢 郵税金八錢

▼原田琴子歌集 ふるへる花 定價金六拾錢 郵税金六錢

▼竹友藻風詩集 浮彫 定價金參拾五錢 郵税金四錢

▼富田碎花歌集 悲しき愛 定價金七拾五錢 郵税金八錢

▼尾山篤二郎 大正一萬歌集 定價金九拾五錢 郵税金八錢

▼小川水明歌集 生靈 定價金六拾錢 郵税金六錢

C55
812

終